

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530719

研究課題名（和文）0歳から5歳までの対人行動の発達プロセスの検討—保育園での観察—

研究課題名（英文）Examination of developmental process of interpersonal behaviors from 0 to 5 years -Observations of a day care-

研究代表者

相良 順子 (SAGARA JUNKO)

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号：20323868

研究成果の概要（和文）：保育園での自由遊びの観察から、1歳半ころに見られる視線を向けるものや接近行動などの個人差は、3歳でも継続してみられ、その頃形成され始める集団での仲間関係が保育園での5歳児クラスの仲間関係と一貫性があることが見出された。

研究成果の概要（英文）：

Through longitudinal observations of several children in a day care center, we found that there were clear individual differences concerning which direction 1 and 2 year olds most often focus their gaze (e.g. at people or objects), and that these behaviors appeared to be predictors of their interpersonal behavior in late infancy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：保育園・観察・縦断研究・対人行動・5歳

1. 研究開始当初の背景

(1) 発達心理学では、子どもの気質などの生得的な個人差と育つ環境との相互作用のあり方に関心をもつ研究が増えている。しかし、その多くが家庭での親子の相互作用を扱っている。近年、保育園で育つ子どもが増える中で、0歳時から集団保育で育つ子どもの発達を検討する必要がある。

(2) 上記の背景により、平成18年～20年に科学研究費（萌芽）の助成を受け、発達の初期の段階で子どもが見せる行動の個人差に注目し、その後の個人差の指標となるも

のを見出そうと試みた。その結果、保育園での0歳児から2歳児クラスでの子どもの観察から視線行動や接触行動などの指標が個人差を示していることを見出すことができた。この成果を踏まえて、本研究の目的を下記のように設定した。

2. 研究の目的

(1) 我々の先行研究で見出された行動指標が、別の園での子どもにも見出されるか確認する。

(2) 先行研究で見出された視線行動、接触行

動などいくつかの個人差の指標のうち、どれがその後の幼児後期の行動と関連するのかを検討する。

(3) 発達初期の行動における個人差が保育園での仲間や保育士との関係形成にどう関係するのか検討し、子どもの持つ発達初期の特徴と環境との相互作用に関して考察する。

3. 研究の方法

(1) 私立保育園の4歳児クラスから5歳児クラスに所属する7名を観察の対象にした。この7名は、平成18年の0歳時点から観察が継続できた子どもであった。観察は週1回、担当研究者の一人がビデオカメラで自由時間で戸外で遊ぶ対象児を5分間撮影した。分析は、DHK社の行動分析ソフトを使って行った。対人行動の指標となるカテゴリは、園庭での遊びから抽出できる行動を設定した。

(2) 担任の保育士と4歳児クラスと5歳児クラスの担任と数回面接して、観察対象児の日常の行動の特徴、仲間関係、家庭環境などを尋ねた。

4. 研究成果

(1) 一連の先行研究では1歳半のよちよち歩きころの観察によって、子どもが視線を向ける対象を指標とすると「もの」志向と「人」志向の二つのタイプがあることがわかった。さらに別の保育園の2歳児クラスの子どもに対してもその行動に「もの」と「人」志向の2タイプを見出すことができた。また、月齢があがるにつれ、仲間へ視線を向けることが増加することが示された。この成果は Infant Behavior and Development (2013) に掲載された。下記の図1は代表的な「もの」志向の子どもの、図2は人志向の子どもの「人」「もの」「特定されない」を見ていた時間を示している。

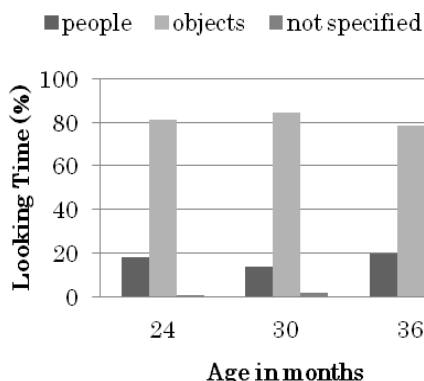


図1 「もの」志向の子どもの注視時間



図2 「人」志向の子どもの注視時間

(2) 先行の研究で、発達初期の行動の個人差を測る指標として、自由遊びの中で視線を向ける対象として自分でもっている玩具を見ている「自操」、他者の操作する玩具を見ている「他操」を見出した。さらに、遊びの間、「座っている」時間と「立っている」時間も指標として加えた。特に「自操」の多い子ども Ta(男児)と少ない子ども Ke(男児)について、これらの行動と、3歳時の他者への接近行動との関連を検討した。Taは1歳半の時点で自由遊びの時間のほとんどを自分の玩具で集中して遊び、一方、Keは立ってふらふら歩く時間が多かった(図3参照)。3歳時でもTaはKeより「自操」の時間が多く、他者を見る頻度はKeより少ない傾向にあった(図4参照)。Taは1歳代から一人で集中して物を組み立てる遊びを好み、他の子どもよりも巧みであった。そのために他児から遊びについて情報を得る必要がなく、他児の方を見る時間が減少していったと考えられる。この点でも、もともと持っている子どもの志向が対人行動の差につながることを示唆された。1歳半で個人差の指標とした「座っている時間」と「立っている時間」は、3歳では活発に活動するようになりTaとKeの差は見られなくなった。

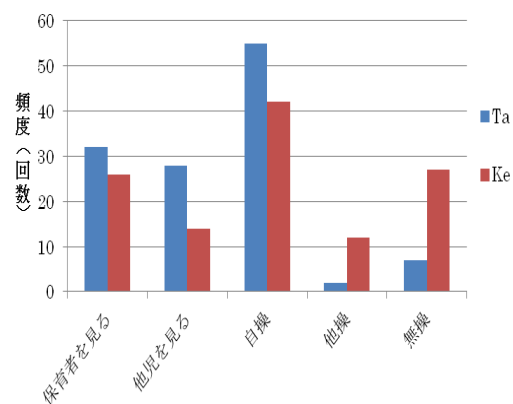


図3 1歳半時に見ていたもの

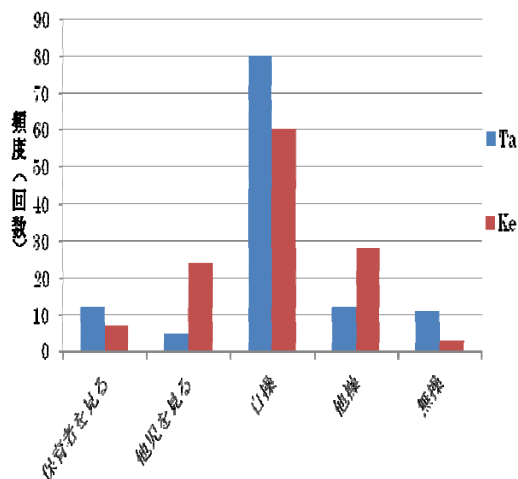


図4 3歳時に見ていたもの

(3) 一連の研究で観察している対象児のうち、男児4名(Ko, Ke, Re, Ta)に対し、4歳児クラスで自由遊びにおける行動観察を行った。行動指標としては、積極的に①誰に話しかけたか②どの程度頻繁に話しかけたか、に着目した。その結果、Koにおいて担任の保育士に話しかけた頻度が他の4人に比べ突出して多かった(図5参照)。これは、Koが担任の保育士をいつも気にかけて遊んでいる様子と一致した。Koを含めた同じクラスの子どもたちが2歳から3歳の時に観察された結果(図6参照)と比較すると、Koは3歳時点で他の対象児よりも保育士を見る頻度が多い傾向が示されていた。3歳の時点(2歳児クラス所属)で保育士へ頻繁に注意を向けるという行動が4歳児クラス所属時でも継続していることが示された。

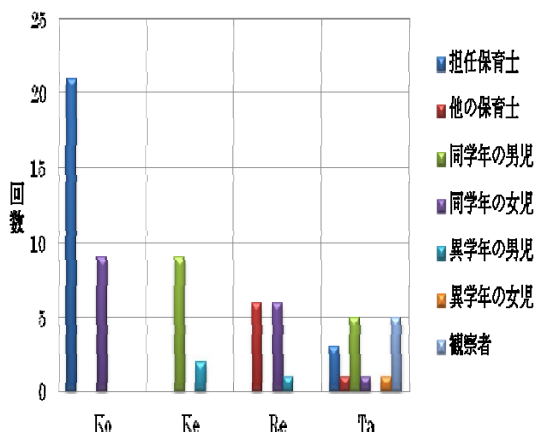


図5 4歳時における話しかけた相手

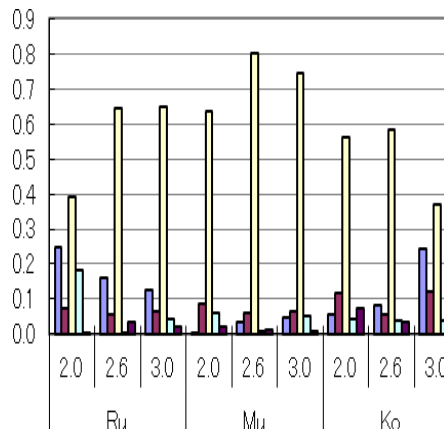


図6 2歳から3歳児における視線を向ける時間の割合(左から保育士、他児、もの、何かを見ている、特定不明)

(4) 4歳児クラスでの観察により、仲間を中心とした対人行動において明らかな個人差が見出された。中でも特に、Ko(男子)は、クラスの中で人気がない子どもと仲間からも保育士からもみなされていた。Koのこの印象はいつごろからもたれていたのか、何が原因なのかについて、2歳児クラスの対人行動場面を質的に分析した。その結果、Koの粘着型の気質に加えて、集団保育の中での声かけなどKoと関わる保育士の反応との相互作用により、Koの集団での地位が形成され始めていることが示された。表1は、Koと保育士と他児との相互作用の事例の一つである。この成果は、国際幼児教育学会の大会で事例研究として発表した。

表1 2歳児クラスでのKoと保育士とのやりとり
10月×日

S(女児)がブロックを並べてつくった電車のおもちゃにKoが手を出す。
S「やめて」と言うがKoなお触る。そのやりとりが3, 4回繰り返される。少し離れてその様子を見ていた保育士は、保「ねえ、Koくん(Koのフルネームで、お友だち遊んでいますよ)」という強い調子で言葉をかけた。しかし、FまたSに手を出す。S「だめ、こわさないでよ」
保「ね、お友だち、使っていますよ」さらにKo手を出す。保「Koちゃん、しつこいね」
KoはあきらめきれないのかときどきSのおもちゃを触りに行ったりして遊びに集中できない様子だった。10分過ぎにSはそのおもちゃをKoに差し出し、以後Koはそのおもちゃで遊びに集中する。

同日 自由遊びのおわりころ。Fが女兒二人でいるところに手を広げて抱きつく。二人が「あっち行って」と強い調子で言う。しかし、やめようとしない。

離れて見ていた保は「Koちゃんて、せっかく借りても絶対遊ばないじゃない」と強い調子で言葉をかける。

(5)まとめ

研究の目的に従って、成果をまとめる。目的の(1)については、視線を向ける行動という指標において個人差が明らかであることが異なる園でも確認された。また、(2)発達初期の行動と幼児後期の行動との関連についても、視線を向けるという初期の行動が幼児後期の対人行動の内容に一貫性があり、視線を向けるという行動は、その後の行動を予測する指標となる可能性が示された。視線によりその子どもの情報収集の個人差が幼児期の数年では安定して表れているといえる。(3)の発達初期の行動の個人差と子どもを囲む集団保育との環境との相互作用については、幼児後期に「クラスで人気のない子」とみなされる子どもを縦断的に観察した結果、言葉のやりとりが発達し、仲間との相互作用が活発になる3歳ころの保育士との言語的やりとりが社会性の発達の重要な要因となることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

① Junko Sagara, Kazu Murata, Chisato Yamano Individual differences in what 2-year-old children look at: Observations in a daycare *Infant Behavior and Development*, 査読あり 35, 2012, 792~796
DOI:j.infbeh.2012.07.002

[学会発表] (計 3件)

① Junko Sagara Does the Gaze of Two-year-old Children Serve as an Indicator of the Disposition?— Observations in a day-care, I C P (International Congress of Psychology) 2012
② Junko Sagara A study on children's characteristics and childcare, 32th Meeting of International Association of Early Childhood Education, 2011
③ 村田カズ, 相良順子, 2歳から3歳までの保

育園児の観察—見ているものはどのように変化するか— 日本発達心理学会、第21回大会、2010

6. 研究組織

(1)研究代表者

相良順子 (SAGARA JUNKO)
聖徳大学・児童学科・教授
研究者番号：20323868

(2)研究分担者

村田 カズ (MURATA KAZU)
聖徳大学短期大学部・保育科・准教授
研究者番号：70389831